

主 題：わが神、賛美します！

聖書箇所：詩篇22篇 22-31節

テーマ：祈りに答えてくださる神様に感謝すること／イエス・キリストの十字架を覚えること

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは、先週に引き続き詩篇22篇です。前回私たちは、この詩篇を大きく二つに分けて考え始めました。そして、前半部分に当たる1-21節を通して、嘆きについて学びました。きょうはその残り22節から最後までを一緒に考えてみたいと思います。

いま一度、内容を思い起こすためにみことばをお読みします。

詩篇22篇 指揮者のために。「暁の雌鹿」の調べに合わせて。ダビデの賛歌

「:1 わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。:2 わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。:3 けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。:4 私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました。:5 彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。:6 しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。:7 私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。:8 「【主】に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」:9 しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に抛り頼ませた方。:10 生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。:11 どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。:12 数多い雄牛が、私を取り囲み、パシヤンの強いものが、私を囲みました。:13 彼らは私に向かって、その口を開きました。引き裂き、ほえたける獅子のように。:14 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。:15 私の力は、土器のかげらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついていきます。あなたは私を死のちりの上に置かれます。:16 犬どもが私を取り囲み、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。:17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。:18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。:19 【主】よ。あなたは、遠く離れないでください。私の力よ、急いで私を助けてください。:20 私のたましいを、剣から救い出してください。私のいのちを、犬の手から。:21 私を救ってください。獅子の口から、野牛の角から。あなたは私に答えてくださいます。:22 私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。:23 【主】を恐れる人々よ。主を賛美せよ。ヤコブのすべてのすえよ。主をあがめよ。イスラエルのすべてのすえよ。主の前におののけ。:24 まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。:25 大会衆の中での私の賛美はあなたからのものです。私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。:26 悩む者は、食べて、満ち足り、主を尋ね求める人々は、【主】を賛美しましょう。あなたがたの心が、いつまでも生きるように。:27 地の果て果てもみな、思い起こし、【主】に帰って来るでしょう。また、国々の民もみな、あなたの御前で伏し拝みましょう。:28 まことに、王権は【主】のもの。主は、国々を統べ治めておられる。:29 地の裕福な者もみな、食べて、伏し拝み、ちりに下る者もみな、主の御前に、ひれ伏す。おのれのいのちを保つことのできない人も。:30 子孫たちも主に仕え、主のことが、次の世代に語り告げられよう。:31 彼らは来て、主のなされた義を、生まれてくる民に告げ知らせよう。」

○前回の復習：

さて、きょうの内容を見て行く前に、前回学んだことを少し思い返してみてください。私たちは、この詩篇をそれぞれダビデとイエス様、二つの視点を通して考えていました。まず、この詩篇を記したダビデは、非常に深い悲しみの中に置かれていたことを見て取ることができました。具体的にどのような苦しみに遭っていたのかはわかりません。しかし、彼はその中でどれだけ祈り求めてもいっさい神様が答えてくださらないことを嘆いていました。そして、先の見えない暗闇の中で、混乱を覚え、もがき苦しみながら「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。」と叫んでいたのです。またダビデは神様が自分から遠く離れているということに絶望を覚えていただけではありませんでした。彼は彼を取り囲む敵たちによっても大いに苦しめられていたのです。彼の敵たちはことばをもって彼をバカにし、侮辱し、その強大な力をもって彼の身を傷つけて打ち砕こうと迫っていました。追い詰められたダビデには、どこにも逃げ場などありませんでした。そんな危機的な状況に陥ったダビデの体は弱り切って、その心も疲れ果てていました。彼のうちにはもう敵と戦う気力すら、わずかにしか残されていませんでした。それが前半で見たダビデの姿でした。

では、そんな厳しい状況に置かれ、苦しみの中にあつたダビデは一体その中でどのようにふるまっていたでしょう？彼がしていたことは変わらずに主に信頼することでした。たとえひどい苦しみに直面し、主が自分に答えてくださらなかったとしても、ダビデは諦めて祈ることをやめはしなかったのです。そうではなく、神様がどのようなお方なのか、特にこの方の聖さや誠実さといったご性質に彼は身を委ねて、そこに希望を見出そうとしていました。揺るがない神様に根差していた彼の信仰は、状況に左右されることはありませんでした。これがダビデの姿でした。

もちろん私たちは彼の姿から学ぶことはたくさんありました。しかし、それ以上に私たちがこの詩篇を通して考えさせられたことは、十字架の上で苦しまれたイエス・キリストの姿でした。イエス様は十字架の上で私たちの想像を絶するほどの苦しみを味わわれました。この方は病気で苦しんでいる者たちの病を癒し、ことばをもってあらしをしずめることのできる、そんな偉大な力を持った神様でした。この方は、この世界を創造し、支配しておられる主権者でした。この世での生涯においていっさいの罪を犯すこともなければ、すべてのことにおいて、完全な正しさを示された義なるお方でした。彼を取り調べたピラトも、この人には何の罪も見つからないと証言されたほどの、そんな正しいお方でした。しかし、そんな罪のいっさいない、主イエス・キリストが何度も何度もむち打たれ、十字架につけられたのです。そのからだは激しい痛みで弱り切っていました。また、十字架を取り囲む人々からは、もしあなたが神の御子なら自分を救ってみろとののしられてはずかしめを受けていました。そしてそれらに加え、何よりも彼は父なる神様から一時的に引き離され、私たちが本来受けるべき罪の罰のすべてをその身に負って、神の御怒りを耐え忍ばれたのです。神のひとり子が、私たちの罪のために刺し通され、だれも経験したことがないほどの痛みと苦しみを味わわれました。生まれながらに神様に逆らって歩んでいた私たちが受けるべきものは、永遠のさばきでした。地獄での苦しみでした。私たちはみなそれに値したのです。すべての者が罪に対して燃え上がる神様の御怒りに値する存在でした。

しかし、本来、私たちに注がれるべき神様の御怒り、罪の罰をイエス・キリストが十字架の上で、私たちの代わりに受けてくださったのです。この方がなだめの供え物として、その血を流してくださったからこそ、今私たちには罪の赦しが与えられていました。一体どうしてこんなことをなされたのだろうか？それはただ神様のあわれみ、愛でしかありませんでした。先週も見ましたけれども、Ⅱコリント 5：21でパウロは「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」と言っていました。だからこそ皆さん、私たちがこの十字架を覚える時に、主がどれほどの犠牲を払ってくださったのかということをいつも心に留めることです。「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。」、その主のことばを耳にする時に、この方がどれほどの苦しみを味わわれたのかということを私たちは忘れてはいけません。

こうして私たちは、この詩篇 22 篇の前半部分を通して、ダビデやイエス様の苦しみというものを見ました。その嘆きというもの、悲しみというもの、苦しみというものは余りにも深いものでした。しかし、前回も言ったように、これでこの詩篇が終わったのではありませんでした。ここから状況は大きく変化していきます。沈黙されていた神様が悩む者の叫びに答えられるのです。そして後半で、苦しみの中にいた者たちが、神様が答えてくださったことによって、あふれんばかりの感謝を持つ者へと変えられていきました。22 節後半で、私たちは神様に対するあふれんばかりの感謝と賛美を見ることができます。前半では苦しみの中での信頼を見ることができました。後半部分では苦しみから救い出された者の感謝を見ることができます。この詩篇は一体どれだけのことを、どれほどの感謝を私たちに示してくださっているのか、そのことを少しずつ皆さんと一緒に見てみましょう。そして願わくは、私たちもそんなすばらしい救いをいただいた者として、感謝する者として成長することができるように、その助けになることを心から願っています。

○感謝：叫びに答えてくださる神様に対する賛美 22-31 節

さて、まず 22 節をもう一度見てください。厳しい苦難の中であえいでいたダビデの様子が一変していました。22 節は「私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。」と綴られています。あれだけ悲しみと痛みで暮れて、死が間近に迫っていた。神様が自分を見捨てて遠く離れてしまったように感じ、絶望していたダビデ。しかし、そんな彼の姿はもうここにはありませんでした。彼の嘆きは感謝へと、彼の涙は喜びへと、彼のうめき声はあふれる賛美へと変わっていたのです。一体どうして彼の心はこんなにも大きく変わったのでしょうか？それは、彼の叫びに神様が答えてくださったからでした。

一つ前の 21 節の最後に「あなたは私に答えてくださいます。」と記されていました。これだけではよくわからないかもしれません。でも実を言うと、この箇所「答えてくださいます」というヘブル語の動詞の時制には完了形が用いられています。つまりそれを踏まえて、そのままここを直訳するならば、「あなたは私に答えてくださいました」となるのです。実際にどのような形で神様が助けを与えられたのかについては記されていません。しかし、神様は確かに彼の祈りの声を聞き入れられたのです。想像を絶するほどの危険や苦しみの中で、遠く離れないでください、私を救ってくださいと。ただ、神様への信頼を表し続けたダビデを、神様は見捨てることはありませんでした。神様は死が間近に迫った危機的な状況の中からダビデを助け出されたのです。この神様は、悩む者の叫びに必ず答えてくださるあわれみ深いお方でした。ダビデはそのことを味わいました。そして、そのことを経験したダビデは、それに対する応答としてあることをするのです。それは心の底から救いを喜び、神様に賛美をささげることでした。「私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。」と。皆さん、その姿を容易に想像できません？彼は確信を深めてこう言っていたでしょう。「やっぱり私の神様はいつまでも黙ったままではなく、自分に答えを与えてくださった。変わらずに愛を示し、必要な助けを与えてくださった。この方こそまことの神様だ」と。

また、特にここでダビデが発した喜びのことばに注目してみてください。「私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。」と書いていました。ダビデは、神様の御名を語り告げていました。言いかえれば、神様のご性質や神様がどのような存在かを覚えて、ほめたたえていた、語り告げていたということです。自分に救いを与えてくださった神様の御力がどんなものか、彼はそのことを人々に大胆に告げていました。彼の焦点は神様にあったのです。でも考えてみてください。そんな彼の姿勢はどんな時も変わっていませんでした。彼の目はどんな時も神様に対して向けられていました。苦しみの中にいる時も、彼は神様の聖さや変わらぬ誠実さを覚えて、そこに信頼を置こうとしていました。苦しみの中から救い出された後も、神様がどんなにすばらしいことをなしてくださったお方か、その力ある姿に心を留めて感謝していたのです。つまり彼の信頼の土台も、彼の感謝の源も、すべ

てにおいて神様が中心だったということです。そして自分に必ず答えてくださる神様がともにいるという確固たる確信が、どんな状況にあらうとも彼の心に大きな慰めや希望、また喜びや賛美をもたらしていました。

こうして、どんな状況にあっても、変わらずに神様に目を向け続けるということは、今の私たちひとりひとりにとっても非常に大切なことです。しかし、私たちはこの点において、時に弱さを覚えることがあるかもしれません。例えば私たちが試練や苦しみの中に置かれている時はどうでしょう？自分の頭で理解できないことが目の前で起こっていたり、悲しみや痛みがいろいろなところから押し寄せてくれば、神様よりも自分の経験しているものに心を奪われてしまうかもしれません。心の中で不安や恐れが増し加われば、本当に神様はこの状況を支配されているのだろうか、私の祈りに答えてくださるのだろうか、神様の知恵や力、約束というものを忘れて、疑ったりしてしまうかもしれません。また逆に、試練の中だけではなく、私たちが試練から助け出された後はどうでしょう？苦難の中で、私たちはよく熱心に神様に助けを祈り求めます。では、その祈りに答えてくださった後は変わらない熱意を持って神様に感謝を、賛美をささげているのでしょうか？私たちは与えられたものを大いに感謝すること、喜んでいことはあるかもしれません。それもすばらしい、大切なことです。でも、果たしてそれを与えてくださった神様に対して、どれほど目を向けているのでしょうか？ダビデは何があっても神様に目を向け続けようとしていました。それが自分の歩みには必要不可欠なものであるということ、さまざまな試練や涙を通して繰り返し彼は学んだのです。ほかの箇所でも、彼はこう述べていました。例えば、詩篇56：8－11を見れば、「：8 あなたは、私のさすらいをしるしておられます。どうか私の涙を、あなたの皮袋にたくわえてください。それはあなたの書には、ないのでしょくか。：9 それで、私が呼ばれる日に、私の敵は退きます。神が私の味方であることを私は知っています。：10 神にあって、私はみことばをほめたたえます。【主】にあって、私はみことばをほめたたえます。：11 私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。人が、私に何をなしえましよう。」と書いていました。神様が味方としていてくだされば、私は恐れない、これはすごい信頼ですよ。ダビデも私たちと変わらずに、恐れを抱くことも、不安を抱くこともありました。涙を流すことも多々ありました。彼自身は弱さを覚えていたのです。でもだからこそ彼は神様の姿をいつも思い起こしていました。そこに力や助けを見出していたのです。これは私たちも模範にしたい姿です。偉大な力を持った神様にダビデは信頼していました。そしてその信頼は彼の心のうちに大きな希望をもたらしました。そしてそれは希望をもたらしただけでなく、同時に神様に対する心からの感謝と心からの賛美を彼のうちに生み出していたのです。

でもダビデはここで、何も自分だけで神様の偉大さをほめたたえていたのではありませんでした。彼は続く23－24節に「：23 【主】を恐れる人々よ。主を賛美せよ。ヤコブのすべてのすえよ。主をあがめよ。イスラエルのすべてのすえよ。主の前におののけ。：24 まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。」と書いています。神様がどれほどすばらしいお方なのかということ、ダビデは味わいました。だから彼は自分で神様に感謝していたのです。でも、その感謝は彼のうちのみにとどまっていることはありませんでした。それは彼の周りにいる人たちへと影響していくのです。彼は周りにいる者たちに言うのです。

「皆さん、私たちの主は悩む者の悩みをさげすまれることはありませんでした。確かに神様が遠く離れて見捨てられたように感じることも私はありました。でもこの方は助けを求める声を聞いてくださり、御顔を隠されることはありませんでした。だからこんな偉大な神様をともに崇めよう」と。24節で出てきている「御顔を隠されもしなかった」というこの表現、神様が御顔を隠さないで明らかにされるといのは主が人々に対して恵みや平安を示されるとか、人々に祝福を与えるといった意味で聖書の中で用いられています。神様が人々の祈りを聞いて、人々に恵みや平安を示されるのです。人々に祝福を与えるのです。例えば、民数記6：24－26にこうありました。「：24 『【主】があなたを祝福し、あなたを

守られますように。:25 【主】が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。:26 【主】が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』」、ダビデは確かに主があわれみによって、自分の祈りに答えてくださったと確信していました。遠く離れたように感じていましたけれども、御顔を向けてくださったと確信していました。だからこそ、彼は同じように主を愛する人々とその感謝を分かち合い、一緒になって神様にほめ歌を歌っていたのです。ダビデは感謝しました。彼の周りいる者たちも苦しみから救い出してくださった救いの神様を感謝していました。

▶キリストの姿④ マタイ 26 : 38-39, 42 ; ルカ 23 : 46

だとすれば、私たちには彼ら以上に賛美する理由があります。私たちはそれ以上に感謝することができます。なぜか——それはイエス・キリストがすばらしい救いを達成されたからです。イエス・キリストが成し遂げられたことをいま一度よく思い返してみてください。彼は十字架にかかる前に、ゲッセマネの園で父なる神様に対して悲しみもだえながら祈っていました。その時のことがマタイ 26 : 38-39 と 42 に「:38 そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」:39 それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」……:42 イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」と記されています。イエス様は死ぬほどの悲しみを覚えられていました。それはご自身がこれから十字架にかかって死んでいくこと、そして何よりも神様の御怒りの杯を飲むということを知っていたからです。私たちのことばでは到底表現できない苦しみが主を待っていました。だから彼自身も二度にわたって、父なる神様にその杯を取り除いてくださるようにと祈っていたのです。助けを求めていました。でも主はその時も自分の願いではなく、父なる神様のみこころなることを祈り続けていました。

そしてそんな祈りをささげた後で、イエス様は実際に十字架にかかっていけます。そしてそこで想像を絶するほどの苦しみを経験されるのです。からだは激しい痛みによって弱り切ってしまい、彼を取り囲む者たちからは自分を救ってみると、悪口を浴びせられました。神の御子が人にばかにされ、はずかしめられたのです。そして何よりイエス様は父なる神様から見捨てられ、その身に罪に対するすべての神の御怒りを注がれました。私たちのだれにも絶対に耐えることのできない、そんな苦しみをこの方は味わわれたのです。しかし、そんなもだえるほどの苦痛の中でさえ、主は最後の最後まで父なる神様のみこころに従っていました。そして「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」(ルカ 23 : 46)、そう大声で叫んで亡くなられたのです。イエス様は確かに十字架にかかって死なれました。その死からは助け出されることはありませんでした。しかし、それ以上にすばらしいことがありました。父なる神様はひとり子イエス・キリストのその声を聞き、この方は3日後に死そのものから救い出されたのです。このようにヘブルの著者も言うていました。ヘブル 5 : 7 に「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」と。キリストは確かに死にました。でもそれで終わりではなかったのです。この方は、墓の中に閉じ込められたままではありませんでした。罪と死の力に勝利して、墓からよみがえり復活されました。この方は救いを達成された、今も生きている偉大な勝利者でした。だからこそ、この方があの十字架の上で救いを成し遂げられたことを覚える時に、私たちは心の底から、主よ、賛美します！と感謝をささげることができるのです。

でも、それだけではありませんでした。この詩篇 22 : 22 のみことばは、ヘブルの別の箇所にも引用されています。ヘブル 2 : 10-12 を見ると——引用自体は 12 節ですが——、こんなふうに記されていました。「:10 神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全う

されたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。:11 聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。:12 「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」と。この箇所はたくさん大切なことを私たちに教えてくれます。それをすべて見ることはできませんけれども、きょう何よりも注目してほしいのは、救いの創始者である主イエス・キリストが十字架の上で多くの苦しみを受けたということ、それは神様のご計画だったということです。そしてその苦しみを通して、この主は、主を信じる者たちに救いを与え、そしてその者たちを恥じることなく「兄弟」と呼んでくださるのです。「主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで」、このことを考えた時に、これがどれだけあり得ないことかをよく考えてみてください。かつて神様に逆らって歩み、罪に汚れた愚かな私たちが主がその尊い犠牲をもって贖い、神の家族の一員として迎えてくださいました。私たちが何かをしたからではありません。主がそれを成し遂げられたのです。そして、驚くべきことは、ほかのだれでもない私やあなたの罪がイエス・キリストを、いや、この罪のない完全なお方を十字架につけました。本来であれば、私たちに注がれるべき神様の御怒りをこの方は私たちの代わりに受けてくださったのです。そして、そんなお方が私たちが兄弟と、神の家族と呼んでくださるのです。一体どれほどの愛を主は私たちに示してくださっているのでしょうか？一体どれほどの犠牲をこの方は私たちのために支払われたのでしょうか？

主は救いを達成されただけでなく、この主にある者を兄弟として呼んでくださる。その事実を覚えるのであれば、私たちがそれに対してできる最もふさわしい応答は、心からの礼拝をこの方にささげることです。主はすばらしいことを成し遂げてくださった、そのことを私たちは感謝することです。

●「私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします」とは？ 25-26節

さて、詩篇の方に戻りましょう。25-26節に「:25 大会衆の中での私の賛美はあなたからのものです。私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。:26 悩む者は、食べて、満ち足り、主を尋ね求める人々は、【主】を賛美しましょう。あなたがたの心が、いつまでも生きるように。」と続いていました。苦難の中から助け出されたダビデは、自分だけが喜んでいただけではなく、主を恐れる人々と一緒になって神様の姿を覚え、賛美していました。神様がなさってくださいしたことに対して、会衆は一つとなって礼拝していたのです。彼らはすべてのものが神様からやってくるということをよくわかっていました。だからこそ、25節に「大会衆の中での私の賛美はあなたからのものです。」と書いていました。神様を賛美するその心さえも神様が与えてくださったと確信し、そのことを感謝していました。

また、この25節の後半部分から、ダビデは不思議な情景を描いていました。「私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。悩む者は、食べて、満ち足り、主を尋ね求める人々は、【主】を賛美しましょう。」と記されています。これをぱっと見た時に、一体なぜ急に「私の誓いを果たします」とか、どうして悩む者たちが食べる姿が出てきているのだろうと不思議に思いませんか？この箇所を理解するためには、この時代の歴史的背景というものを覚える必要があります。もうご存じの方もいるかもしれませんが、この時代、人々は神様の前に何らかの助けを願ったり、何かの誓いを立てた後で、その祈りがかなえられたのであれば、必ず感謝としていけにえをささげる決まりがありました。これを別のことばで言えば、“和解のいけにえ”というもので、レビ記7章にも記されています。

いけにえのことを考える時に、一例として挙げられるのは、あのハンナの姿かもしれません。いつまでたっても子どもができないことを嘆いて、主の宮で激しく泣いていた彼女は、主の前にこんな誓願を立てていました。そのことがIサムエル1:11に「そして誓願を立てて言った。「万軍の【主】よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を【主】におささげします。」と記されています。続けて男の子をくださいと願ったのです。そして同時に、その子が授けられたのであれば、その子の一生を主におささげ

しますと誓っていました。そして神様はそんな彼女のことを心に留められ、ハンナには待望の男の子サムエルが与えられました。サムエルが与えられた後、ハンナはその子が乳離れするまでは育てて、約束どおりに主にその子をささげ、いけにえをもって主に礼拝をささげていました。その姿が続きの24-25節にこのように描かれています。「:24 その子が乳離れしたとき、彼女は雄牛三頭、小麦粉一エパ、ぶどう酒の皮袋一つを携え、その子を連れ上り、シロの【主】の宮に連れて行った。その子は幼かった。:25 彼女は、雄牛一頭をほふり、その子をエリのところに連れて行った。」と。こうしてハンナは祈りがかなえられたことを、いけにえをささげるという行為を通して神様に感謝したのです。それがこの当時に行われていたことでした。

そして、これと同じことをダビデはここでしたのです。彼は神様に助けを求めて誓いを立てていました。そしてその祈りがかなえられ、答えられた感謝のあかしとして、人々の前でいけにえをささげていたのです。また、この和解のいけにえに関しておもしろいのは、和解のいけにえをささげた後、それをささげた者やその家族、友人、そしてそれに加えて、特に貧しい者やしいたげられているような者たちと一緒にあってそれで食事をとっていました。神様に感謝としていけにえをささげる者は、そうやって多くの人々と食事を共有することによって、神様に対する感謝を分かち合っていました。ダビデは、神様が確かに祈りに答えてくださった、救いを与えてくださったというすばらしい知らせを、できるだけ多くの人々の前で告げ知らせようとしていました。喜びにあふれて、それをしている彼の姿を想像できません？彼は言っていたでしょう、今、悲しみにくれている人も来てください、苦しんでいる人たちも集ってくださいと。主を求めている人も集まってくださいと。神様はこんなにもすばらしいことを成し遂げてくださいました。かつて私の心も苦しみによってろうのように溶けてしまいそうになりました。でも、今は喜びでいっぱいです。私たちの主が決して悩む者を見放さず祈りに答えてくださった。こんなすばらしい神様なのだ、そうやって彼は人々と一緒にその感謝を分かち合っていました。ダビデは自分のうちだけで神様の祝福をとどめるのではなく、周りの人々と一緒に喜んでいました。彼自身の神様に対する信頼は、彼のうちに賛美をもたらしただけではなく、彼の周りの人々にも賛美をもたらしたのです。

そして皆さん、これは今の私たちにとっても大切なことです。私たちが信仰生活を送っていけば、良い時もあります。でも、当然悪い時もあります。さまざまな試練によって悩まされる時があれば、いろいろな過ちや失敗、罪との葛藤を経験して、次第に喜びが薄れていくようなこともあるかもしれません。先が見えない暗闇の中に置かれて、何より神様が自分の声に、自分の祈りに答えてくださらない、そんな思いにさいなまれれば心が恐れや不安でいっぱいになることもあるでしょう。それはみな、私たち経験するのです。ではそんな時はどうします？もちろん、私たちはそれぞれがみことばに立ち返って神様の姿を覚えることはできます。ダビデがそうしていたように、神様の変わらないご性質に心を留めて、そこに希望を見出すことができます。それも当然すばらしいことです。でも同時に、私たちは同じ神の家族として召された兄弟姉妹と励まし合うこともできるのです。もしだれかが神様を見上げることに苦闘しているのだとすれば、そばに寄って私たちの愛する神様はこんなにもすばらしいお方のだと、みことばで分かち合うことができます。もしだれかが悲しみや痛みで暮れているのだとすれば、ともに悲しんで、みことばに記されている神様の約束を思い出させながら祈り、支え合って歩んで行くことができます。もし神様が祈りに答えてくださったという感謝を自分が持っているのだとすれば、その感謝を分かち合うことで、お互いの中で神様のすばらしさを覚えることができます。あなたの感謝がほかの人の感謝にもなり、ともに主を賛美することができるのです。ダビデはそうやって、苦しみのことばだけでなく、神様への信頼や感謝を人々の前で言い表し、ともにそれを分かち合っていました。私たちも同じです。私たちも自分ひとりのうちにそれをとどめるのではなく、同じ主を愛し、恐れる者と

ともに偉大な神様を分かち合うことができるのです。それは私たちにとって特権です。ともに主を見上げて賛美をささげ、励まし合うことができます。

▶キリストの姿⑤ ピリピ2：10－11

さて、ダビデはそのようにして感謝をささげていました。彼は自分が救い出されたことを自分自身が神様に感謝していただけて、周りの人たちとも一緒に賛美をささげていました。しかし、それで終わりではなかったのです。彼のその賛美、彼のその感謝は、彼の周りでもとどまりませんでした。残りの27節から最後にかけて、今度はその感謝が全世界にまで語り告げられていく様子を見て取ることができます。偉大な神様の姿が全世界にまで告げられていくのです。27－29節に「:27 地の果て果てもみな、思い起こし、【主】に帰って来るでしょう。また、国々の民もみな、あなたの御前で伏し拝みましよう。:28 まことに、王権は【主】のもの。主は、国々を統べ治めておられる。:29 地の裕福な者もみな、食べて、伏し拝み、ちりに下る者もみな、主の御前に、ひれ伏す。おのれのいのちを保つことのできない人も。」と続いていました。「地の果て果てもみな……【主】に帰って来るでしょう」、「国々の民もみな、……伏し拝みましよう」とはっきりと記されていました。「地の果て果て」も「国々の民」もみな、言い換えれば、この世界に住むすべての者たちがすべてのことを統べ治めておられる主の主、王の前にひれ伏して、礼拝をささげる時がやって来るということです。29節には、「地の裕福な者」、つまりこの世において富にあふれ、あらゆる点において豊かな者もそうです。「ちりに下る者」や「おのれのいのちを保つことのできない人」、つまりあらゆる点において貧しくて、心も体も弱り果て、今にも死にかけた者もそうです。言われていることは、富んでいる者であろうが、貧しい者であろうが、どんな境遇の者でも関係なく、すべての人が主を見上げ、この方の御前にひざまずく時がやって来ると言うのです。

私たちはこれがイエス・キリストによって成就するということをよく知っています。パウロはピリピ2：10－11で「:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」と述べていました。かつて激しい苦痛を味わい、はずかしめを受ける中で、キリストは十字架の上で死なれました。彼を憎む人たちは私たちが勝利したと思ったことでしょう。しかし、それは大きな間違いでした。イエス様は死んで終わりではありませんでした。この方は3日後によみがえり、死の力や罪の力を打ち破ったのです。そして今なお勝利者として生きておられる。その偉大な主に、この世界のすべての人がひざをかがめ、ほめたたえる日がやって来る。そのことも私たちの心に感謝をもたらすものではないでしょうか？すばらしい希望が待っているのです。

▶キリストの姿⑥ ヨハネ19：30

でもそれで終わりではありませんでした。30－31節に「:30 子孫たちも主に仕え、主のことが、次の世代に語り告げられよう。:31 彼らは来て、主のなされた義を、生まれてくる民に告げ知らせよう。」と続いています。言い換えれば、主が成し遂げられたすばらしい救いの知らせは、今を生きている者だけでなく、まだ生まれていない者にも続けて語られているということです。「子孫たちも……次の世代に語り告げられよう」、「生まれてくる民に告げ知らせよう」、主の栄光をほめたたえるのは、何もその時を生きる者たちだけではないのです。その輝かしい栄光は次の世代へと、また次の世代へと、次の世代へと述べ伝えられ、それを聞き入れる者たちによって同じように賛美がささげられていくのです。神様はすばらしいお方だ、そのことが語り告げられていくと。

そして最後に、この詩篇を締めくくるに当たって注目してほしいことばがあります。それは31節の最後のことばです。ただ残念ながら、皆さんの聖書にはこう書いてあるかもしれません。「彼らは来て、主のなされた義を、生まれてくる民に告げ知らせよう」と。この箇所をそのまま訳すとこうなります。「彼らは来て、生まれてくる民に主の義を告げ知らせよう。主が完了されたから」と。この詩篇最後のことばは「主が完了された」でした。このことばを聞いて、皆さんなら思い当たることがある

のではないのでしょうか？そのとおり、これこそあの十字架の上で主イエス・キリストが最後に発したことばでした。ヨハネ19：30に「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。」とあります。だからこそ皆さんよく考えてみてください。この詩篇は「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか」という、主の十字架上での悲痛の叫び、嘆きで始まり、「完了した」という主の勝利宣言で終わっていたのです。この詩篇22篇を通して、私たちが何を見られたのかというと、まず苦しみが出てきました。でも、その苦しみは苦しみで終わりませんでした。その苦しみは喜びへと変わったのです。嘆きは賛美へと変わりました。皆さん、確かにイエス・キリストを思えば、イエス・キリストは十字架の上で想像を絶するほどの痛みとはずかしめを味わわれました。罪のない完全なお方が父なる神様から見放され、罪に対する燃え上がる御怒りをその身に受けられました。でも、その苦しみを通して主は救いのみわざを完了されたのです。この方が私たちの罪のために刺し通されて、咎のために砕かれたからこそ、私たちに必要だった罪の贖いは成し遂げられました。これらすべてが神様のご計画だったのです。

〇まとめ

だとすれば、こんな偉大な救い主に対して、果たして私やあなたはどのように応答するのでしょうか？私たちのふさわしい応答はこの方を心からほめたたえることです。たとえどんな状況に置かれることがあったとしても、主がどのようなお方か、この方が何をなされたのか、そのみわざをいつも覚え、感謝することです。この世に存在するありとあらゆるものは、時とともに変わっていきます。私たちの周りにもあるものも次第にすたれていきます。もっと言えば、罪にあふれたこの世界は、これから先ますます悪がはびこるようになっていきます。しかし、決して変わらないものがあります。それは救い主イエス・キリストがもうすでに完了された、成し遂げられた十字架のみわざです。だからこそ、この十字架に示された神様の愛を、その犠牲を私たちは決して忘れることがあってはいけません。ここに私たちの確信があります。主はご計画を成し遂げられた、救いは完成された。そして私たちの周りにはまだこの主の愛を知らない者がたくさんいます。私たちがそれを知ったのであれば、何よりその者たちに語り告げていくことです。私たち自身もだれかからそのことを聞いたように、ほかの人にもこの主のすばらしいみわざを宣べ伝えていくことです。私たちの愛する主は十字架の上で苦しみました。私たちの身代わりとなって、なだめの供え物として、この方はあの十字架の上で亡くなりました。しかし、それで終わりではなかった。この方が復活して、そして今も勝利者としてすべてのものを支配されているのです。こんなすばらしい主の姿を、救いを完成された主の姿を、今週もそれぞれ覚えて、この方の栄光を喜んで現す者として歩み続けていきましょう。